

渡辺克己著



第十章●外堀かいわい



奥付け／デジタルブックについて

- 第十章 ● 外堀かいわい
- 【写真】完成時の大分停車場
(大正初年)
- ・堀の水防
 - ・裁判所とカラタチ
 - ・大分高小の誕生
 - ・金池校の樹木
 - ・「中学道」回想
 - ・駅前あの店
 - ・九州横断線の開通
 - ・オイチニ
 - ・金池町の草わけ
 - ・ナンテン屋敷
 - ・痴漢の出る道
 - ・有楽館付近
- この店

発行に当たって

▽この電子ブック「大分今昔」は昭和 37 (1962) 年 11 月から翌 38 (1963) 年 12 月末まで、1 年 2 カ月にわたり大分合同新聞に 295 回連載され、連載から 20 年後の昭和 58 (1983) 年大分合同新聞文化センターで書籍として出版されたものを、電子ブックとして再編集したものです。したがって、文中の「現在」とか「いま」というのは昭和 37、8 (1962～63) 年当時のことです。

▽使われている町名も、その後、街区制の変更によって連載当時とは変わっており、その場所を知る手がかりになる建物も、いまでは移転したり、なくなったりしているものがあります。このため、おもなものは各章の終わりに「注」として、昭和 58 (1983) 年現在の町名、場所を説明し、わかりやすくしています。



完成時の大分停車場（大正初年）

堀の水防

「いらんなさい、昔は一面の荒野、いまは花園。みんなあなたの力です…」

西部開拓の物語りを描いたジェームス・スチュアート主演の「リバティ・バランスを射った男」というアメリカ映画のラストで妻が主人公に、こうしみじみと語りかける場面があった。だいぶん前に見た映画で別に話題になるようなものではなかったのだが、このことばだけが妙に強く胸に残っている。

中島かいわいや、外堀から金池、南新町一帯の住宅や商店の建ち並んだ明るい町を歩いていると、あの映画のラストのことばがふとよみがえってくるのである。

あのたんぼやレンコン畑、そして低湿地の「荒野」が、住宅の建ち並ぶ「花園」に姿を変えると、だれが想像しただろうか。それにしても「みんなあなたの力です…」ということばをだれに呈上したらいいだろうか。人口の増加による都市の膨張という「自然の力」か、市民のたくましい「生命力」か。まあその両方に「あなたの力です」と呈上することにしておこう。

明治二十四年に岩崎小二郎知事が府内の全部の堀を埋め立てるまでは、高い「お土囲」と広い堀にへだてられた外堀から向こうは「町の外」であって、まったく顧みられなかったのである。いや埋め立てられたのちだって、上野に農家が点在しているほかは、大道と東新町の街道すじにわずかに人家があるくらいで、まったく荒涼とした田園地帯の歴史はずいぶん長く続いている。

この堀の構造は市内の水防にはまことによくできていて、少々の降雨はこの堀が飲みこんで、海に落としたが、さらに堀と「お土囲」の間は、堀よりも高く、他の土地よりも低い数間の緩衝地帯を置いていたそうである。大雨で広い堀が水を収容しきれなくなると、この緩衝地帯で受けとめ「お土囲」の切れ目、つまり「門口」から市街地に水がもろに浸入してこないようにしてあったわけだ。

しかも大水になると「門口」に土のうを積み上げて水を防いだ。

ところがこの堀の働きたいしては、まったく顧慮しないで埋め立てられ、小さなミゾを残しただけなのだからたいへんだ。にわか雨が降っても、上野以北の広い田園地帯の地表を流れた水がミゾをたちまちいっぱいにして道路にあふれた。

第一尋常高等小学校（金池） 一帯は土地が高いのでここだけが島のようになる。

こどもたちは、尻を高くまくって、ジャブジャブ水の中を渡って学校へ出かけなければならなかった。

大手通りから外堀に出るには石橋を渡らねばならなかったが、大雨になるとこの橋を濁流が越えて奔流するのであぶなくてならない。市内のこどもがよく橋の上から流された。

それで、昼間ちよつと大きい雨でも降ると、親たちは下校するこどもを迎えに集まってきた。川のようになった大手通りを通り、水中に没した石橋を渡って迎えにゆく親たちの姿は、当時珍しい風景ではなかった。大手通りは「大手川」という異名をちようだいしていた。

裁判所とカラタチ

外堀にいちばん最初に進出したのは裁判所だった。

維新後は、藩政時代の奉行所がそのまま県の裁判所に移行して、各県独立のかたちで裁判事務をやっていたのだが、明治九年にこれを廃止して中央に統轄された。大分県はそのさい熊本地方裁判所大分支庁として新たに設置され、県庁舎の一部を借りて開庁している。於北町（外堀）に移転したのは開庁の翌々年（明治十一年）で、於北町とは堀をへだてた向こう側に仮庁舎を新築した。そのとき於北町の町名を裁判所付近まで広げたのではないと思われる。

この明治十一年には監獄署が県庁前から大道町に新築移転している。どちらが先だったかわからないが、とにかく密接な関係にあるのだから互いに便利のよいように、ごく近い場所を選んだのだろう。

明治十五年に熊本地方裁判所大分支庁を昇格して、大分始審裁判所となり、十九年にりっぱな庁舎に改築した。これが戦災で焼けるまであった建て物で、陪審法廷や、弁護士控所などは昭和年代になってから付設された。

カラタチを植えこんだ土べいを広々とめぐらせた庁舎が、田園の中に堂々と建って近づきたい感じをただよわせていたものだが、現在あのあたりがすっかり姿を変えたので、それがどこであったか見当をつけるのにとまどってしまう。現在の吉田伴一商店大分給油所のあたりが中心ではなからうか。

監獄から被告人がナワ付きでぞろぞろと裁判所にひかれてゆ

くの、こどもたちは登校の途中でよく出合った。

「立ち止まってじろろ見るんじゃないよ」と母親はこどもに注意していたが、なんだかこわくて立ち止まってながめるなんて、こども心にはとてもできなかったそうだ。

カラタチの生けがきで思い出したが、大手通りにあったところの県議会議事堂もカラタチの生けがきだったし、七十二連隊の兵営の周囲も高い土べいの上にカラタチがびつしりと植えこまれていた。大分大学学芸学部になった現在もそれはもとのままに残っている。

官庁や兵営だけではない、いま長浜小学校になっている旧女子師範の校庭の周囲もカラタチの生けがきだった。あれも少し残っている。

白秋の「カラタチのとげは痛いよ…」の詩をかりなくても、あの鋭いトゲは人を寄せつけないきびしさを持っているし、純白の花のふくいくとしたかおりは清そである。そのような風情が明治年代の人の好みに合ったのだろうか。

いまはカラタチを家の周囲に植えようなんて人はいない。白秋の歌は知っていても、それがどんな木だか知らない人が多からう。

大分高小の誕生

裁判所の次にできたのがいまの金池小学校。当時は「大分町外七カ町村組合立大分高等小学校」で明治三十五年四月二十三日に落成式を行なった。



創立当時の大分高小（挿絵：田中 昇）

あの一带はちよつとした高台で、ほかのところが水田やレンコン畑であるのに、あそこだけは畑地でダイコンの産地だった。府内の人は金池ダイコンと称していた。またこの地帯の土質は赤土で、壁土などにはもってこいのものだったらしく、地主は掘り起こして売っていた。馬車に石炭箱を十個ぐらい乗せ、これに土を入れて運んでいたが、一馬車二十銭ぐらいだったそうだ。

大分高等小学校の創立は明治二十年。このとき大分県に初めて小学校の上級校として大分町に設立されたもので大分県総町村組合立の大分郡高等小学校と称した。開校のさいは校舎がないので長池善巧寺で仮開校式を行ない、善巧寺、浄竜寺（胡町）佐藤清庵氏宅（万屋町）を借りて教室にあてたとある。

四力月ばかりこの仮教室で授業を行なったあと、荷揚町の旧藩の勘定所跡（いまの教育会館前付近）に移った。初代校長は宇野九八郎、職員は八坂黙丸、上原鹿造、春山米太郎、後藤結吉、内田孝二郎、谷山ヒサ、岩瀬乙彦の七人。生徒は男七十八人、女六十五人であった。

この勘定所跡には高等小学校がはいるまでは、大分小学校（荷揚町小学校の前身）の、女生徒ばかりを別にした大分女学校と称していたものが、授業をして

いた。当時の高等小学校の生徒は年齢がまちまちで十二、三歳から十八、九歳までが雑居するありさま。女生徒は日本髪をゆった結婚適齢期のものがたくさんいたから、生徒間の恋愛はもちろん、先生との間違いも心配されるほどだったそう。裁縫科には毛糸のあみものや、ミシン機械を購入して授業する新しさを採用していた。女生徒はその珍しさに大喜びしたそうだが、親たちにしてみれば、高価な毛糸で、いりもしないヒモや人形の帽子、人形のヨダレ掛けなどを作られてはたまらないと大いに不満をもらすものもあったという。

年々生徒も多くなったので明治二十七年に大分尋常小学校（現荷揚町小）の東隣に校舎を新築して移り、さらに三十三年に新たに大分町外七力町村組合立として出発することになったので、この機会に新校舎を建てようという議が起り、翌年金池で新築工事に着手、三十五年四月に引っ越した。このときの校長は伊藤幾太、ほかに職員が三十三人、生徒は八百十九人に増加していた。

ところで高等小学校の創立当時の日誌にこんながある。「明治二十一年五月八日。其筋より校の内外を問はず生徒に軍歌を歌はしむる事を禁止する旨内達せらる」。

私たちの記憶にあるのは軍国思想高揚の、軍歌をむりにでも歌わせられたことだ。それを思うと、ちよつとフに落ちない「軍歌禁止」だが、明治二十一年ごろは自由民権運動の盛んな時代で、大分県でも当時豊州改進黨をつくって小原正朝が総理となり、西村亮吉知事の官僚政治にたいして激しく抵抗しており、二十一年には小原正朝が県議会議長となつて知事とやりあつて

いる。政争県大分はこのときに根ざしたものだといわれる。とにかくそういう自由民権の波が教育におよんだのかもしれない。

この小原正朝という人は竹田岡藩士で、若いころ県の役人となり大書官という重職まで進んでいる。このとき西南戦争が起これ薩軍が県庁に迫ったさい、赤サヤ一本を腰にさして単身敵を追い、県庁員をして、その豪気さに舌を巻かせたというから、たいした人物だったにちがいない。のち官を辞して大隈重信の改進黨に参加、大分県の自由民権思想鼓吹に努めたが四十六歳の若さで死亡している。

金池校の樹木

大分高等小学校が金池に新築されたとき、その内容外観とも九州第一の名をあげ、生徒たちはそれを誇った。最近西日本一とか九州一とかいう建造物がぞくぞく建って食傷きみだが、明治年間の九州一はまさにそう呼ぶにふさわしい威風堂々の姿だったにちがいない。しかもそれが田園のまん中にこつ然と建ったのだからよい目立ったのだ。

当時のおもかげをしのぶものは北側の第一校舎の半分と、中校舎の全部。ずいぶん老朽してしまつて第一校舎は半分が改築の運命となつたのだが、数年後には全部消えてしまうだろう。中庭に珍しく巨大な大王松とケヤキが植わっていて、深い影を教室におとしている。これも創建のさいの記念樹にちがいない。教室を暗くするというので切り倒したらどうかという話がでた

こともあったが、衛藤現校長は学校の歴史とともにある木だからといって反対したそう。

大正年代に長く同校の校長をしていた幸光記さんは、金池校建築当時教員をしていて、荷揚町の校舎から引越しのさいその校庭から大きなヤナギの木を一本移植して、大分小学校の校長から大目玉をくらったという。そのヤナギはのちに枯れたが、枝をたくさんさし木にしたものが成長して、盲学校との境のところにそびえたっていた。これも戦災で焼けて消え、その枝をさし木にして西門付近で育てていたのを、もとの位置に移したのが、いま大きくなっている。

学校の正門はもとは北側だった。外堀通りからその正門にはいる道の両側は低くて、人家の軒が道路と同じ位の高さにあった。石がきで築いたその道の両側にマキの木の並み木があった。これは大正五年の卒業生が記念に植えたもので、それまではカラタチが植わっていた。このカラタチを引き抜くのに、トゲが痛くて近寄れない。そこで運動会のツナ引きにつかうツナをかけてヨイショヨイショとツナ引きよろしく引っこ抜いて、記念植樹をしたのだそう。戦前までは丸くきれいに整枝されてまことに美しい並み木に育っていたが、いまは見るかげもなく荒れている。

だいたいあの道は学校の土地だったものだ。ところが戦後正門が西側に移されてから、あの道は付近の商社の自動車の引き込み場所とされ、あるいは物置き同様に扱われ、マキの並み木は近所の家の物干し場にされるありさまと化した。あまりひどいので衛藤現校長が立腹して「校地だから一般の立ち入り禁止」

を言い渡した。すると「市道にたいして勝手なことをするな」とさかねじを食った。調べてみると、なるほど、いつの間にか市道となっており、学校側は一言もなかったという。

道路はどうでもいいが、マキの木は卒業生の記念樹、大切に保存したいものだ。

「中学道」回想

外堀から上野に行く道路というものは、もともとなかったのだ。上野道というものは光西寺のところから監獄の裏を通って、ななめにたんぼの中を突つきり、上野のトントン落ち（初瀬井路から金池一帯の水田に水を落とす井路の分岐点をそう呼んでいた）のところからたらたら坂を登るものと、東新町を抜けて元町方面から山ぞいにはいつて行くものの二つだけだった。

だから明治二十七年に大分県尋常中学校が大手通りから上野に新築移転して、しばらくの間は、大分町から通学する者はたんぼのあぜ道をたどって行かねばならなかった。

なにしろ元気のいい連中のことだから、あぜ道は踏みこわされるし、作物は痛めつけられると、農家から苦情が絶えない。それに大分県唯一の中学校本校に行くべき道路がないとはふつごうだというので間もなく外堀通りのちょうどまん中辺から、まっすぐにトントン落ちに突き抜ける道路を作りあげた。

これを「中学道」と呼んだ。それは、たんぼの中を広い道が走って、右手に伝染病患者を収容する避病院が陰気くさく孤立しているほかまったく家はなかった。

春はナタネやレンゲの花にかこまれ、夏は青田を渡る風に送られ、秋はうれた稲の香にむせ、ボントンボや道路を占領したイナゴやバッタに迎えられたあの「中学道」。そして「忠告」と称する上級生の理不尽な鉄けん制裁に、ふんまんやるかたない胸をおさえて帰った道。さらにまた肩で風を切り下級生をへいげいして登校した道でもあった。かくて明治年代の大中学生には、まぶたの中にありありと浮かぶ「中学道」。

明治四十四年に大分まで鉄道が伸びて、「中学道」は大分駅構内に切断されてしまった。そのかわりに、大手通りからまっすぐ抜ける新しい「上野道」が生まれた。

しかし、通られた「中学道」は市民には忘れられない道だったとみえ、ずっとのちまでも駅構内を踏み越えて利用していたし、駅側も黙認のかたちだった。もちろんいまは抜けられない。

あの「中学道」は、いまは九電の西側をはいるゴミゴミした舗装道路となっている。奥には右に大分バスの整備工場、左に膳所病院。行きどまりは、駅の構内と鉄道員住宅にそって東西に抜ける道路がある。バイ煙のにおいと、石炭のほこりが舞っていて、昔のおもかげをたどるよすがもない。

例えば、あの「中学道」と、それに続く「上野道」が、あの一帯開発の動脈となったのだ。

駅前あの店この店

明治四十四年に鉄道がようやく大分にのび、外堀の向こうに駅舎が建った。いま思えば高原の小駅のような貧寒とした駅舎

だったが、とにかく県庁所在地について汽車が着くようになったのだから、人々の喜びは大きかった。上市町で突き当たりだった中央通りが外堀まで抜け、外堀から駅までは、たんぼの中に土盛りをして石がきで築いた新通がまつすぐにできた。

むろん右手に裁判所があるほか、たんぼの中に駅舎がぽつんと建っているだけで、あのあたりは一軒の人家もなかったのだ。なにしろ最初は汽車がはいっても、乗降客は五、六人しかないのだから、しばらくの間は旅客相手の店もできなかった。

駅ができた翌年ごろ、駅に向かって左側の道に面して荒巻衛藤次さんが小さな食堂を開いた。当時うどん一杯が二銭。店の前にワラジもぶら下げて売っていた。このワラジ一足も二銭だった。当時地下タビなどなかったから、駅夫はみんなワラジばきだったし、人力車夫もむろんワラジが必需品だ。だから、よく売れた。

駅のかたわらに人力車夫の立場も建てられて、いつも数台の人力車がたむろしていたが駅のお世話になるので駅付近の草むしりやそうじは人力車夫がすすんで奉仕していたそうだ。人力車の車輪の軸には必ず予備のワラジを結びつけてあったそうで、どこでワラジが切れても、すぐはきかえられる心がまえをしていたのだという。いわばこのワラジは、自動車が予備タイヤを一つ持っているようなものだ。

荒巻衛藤次さんの食堂は、むすこの慶一さんがシベリア出兵に従軍しユフタの全滅戦で戦死したので女婿の佐藤岸太郎さんが後継者となり、のちに自由亭と店名をつけ、食堂とパンで大いに売りだした。

衛藤次さんの食堂に続いて安藤槌蔵さんの運送店や、大丸運送店、日通などが店を出した。また駅に向かつて右側に安部兼太郎さんの讃岐屋旅館が西新町から移つてき、つづいて庄内から出てきた一法師ミツさんの大黒屋旅館、西新町の久野新一さんの住吉屋旅館が建ち並んだ。

のちに、これらの旅館は戦争中の疎開を受けてちりぢりとなり、讃岐屋はいま三代目の義兼さんが天神町で食堂、住吉屋は外堀で住吉ホテルを新一さんが健在でやっている。

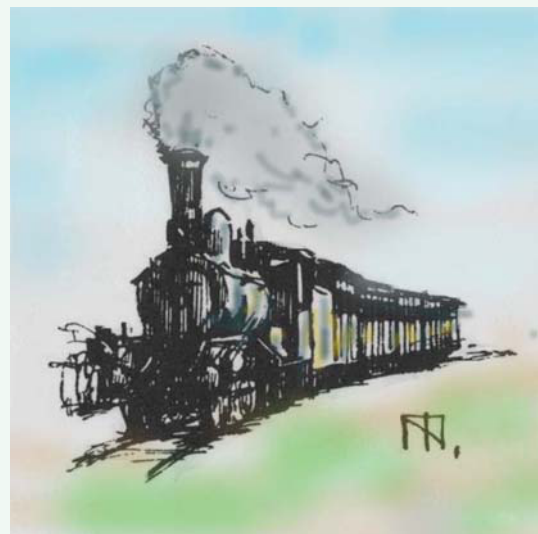
駅弁当の梅の家を木下淳太郎さんが始めたのは大正六年。はじめは安藤運送店の裏の物置きを借りて開業した。これが木下家の大分に根をおろした最初である。

自由亭の佐藤岸太郎さんが昨年金婚記念に奥さんと全国を旅行した。そのとき方々の駅弁当を食ってみたが大分駅の弁当がいちばんうまいと感じたそうだ。「お国自慢のようだが、だいいち駅弁の内容そのものが、よそに比べると充実しているんだよ。駅弁に一理屈いう人は気を付けて食べ比べてみるといい」というのである。これは知らなかった。

九州横断線の開通

大分まで鉄道が延びてからは、大分を起点とする鉄道敷設はとんとんびょううで進展している。

大分駅開設の翌年（明治四十五年）には大分・佐伯線と大分一犬飼線に着工し、大正三年には大分・幸崎間と大分・中判田間の開業をみている。これは国有鉄道の敷設だが、一方私鉄の



大湯線の列車

方は大湯鉄道株式会社が、大正二年に設立され、同四年には大分・小野屋間が開業した。

この大湯線の駅はいまの自由亭食堂や日通のあるあたり一帯で、あそこからいまの吉伴商店大分出張所のところを通り金池町の共和電気建設会社の前の道路が鉄道線路となる。さらに豊州女学校跡の建て物（現在アパートとなっている）の南側の道路を抜け、しだいに南にカーブを描いて顕徳寺町の大分経理専門学校の北側あたりから土を盛って線路はだんだん高くなり、日豊線に陸橋をかけてこれと交差、若宮神社の北西付近にくだつてきた。それから先は、現在の久大線と変わらない。

日豊線と交差した陸橋は、大湯線が国鉄に身売りのち取りのけられ、そのおもかげをとどめない。先日、若宮社の近くまで行つたさい、線路横の畑の中に、まるで古墳の跡でもあるように、ひとかたまりの小高い土盛りがあつて雑草が茂ってい

るのを見つけた。付近の老人にたずねたら、それが陸橋の土盛りの、わずかに取り残されたものだという事だった。

大湯線を日豊線と交差させるために盛り上げた土は、おもに上野の台地から運んだそうだが、また線路横の土も掘り上げて使ったそうだ。大分経理専門学校の北側付近の土地が低くなっているのは、そのためだという。

大湯線の小さな機関車が、たくさん貨車や客車を引っぱって陸橋にかかる、そのこうばいを登りかねた。まさに、あえぎあえぎという形容どおりの苦しげなありさまでようやく登った。登り切ると、やれやれといったような汽笛をあげ、勢い込んで下っていく。

この私鉄線大湯線は、いまの中年以上の人にはなつかしい存在であったが、いつまでも小野屋まででそれ以上延びる力のない私鉄ではあの線の開発はおぼつかなかった。それで大正十一年に国鉄に買収され、大正十四年には北由布まで、昭和四年に豊後森、同八年に天ヶ瀬まで鉄道を延長した。これに久留米から延びてきた鉄道が昭和九年に天ヶ瀬に達して、九州第二の横断線としての久大線が全通したのである。

豊肥線の全通は久大線より六年早く大正六年に犬飼に達し、着々と西進して大正十三年に竹田に達した。そして熊本側から延びてきた鉄路と昭和三年に宮地で握手して豊肥線を完成した。これが初の九州横断線である。この工事の難関は阿蘇外輪山の束壁を越えることで、竹田から宮地までの開通に四年の歳月を費やしている。

この豊肥線、久大線の開通で、最も大きな打撃を受けたのは

大道町で、明治、大正にかけての繁栄は大正末ごろを最後に急激に斜陽化していった。その逆は、大分駅前から中央通りや外堀にかけてで、めざましく発展していったのである。

オイチニ

外堀の西新町に近いところ、津未弁護士邸（いま井上喜農機のあるところ）の前の道路を、初瀬井路の水を城下町に送る水路が横ぎっていた。この水路のためにそこだけはちよつと高くなっていて「乗り越え」と呼んでいた。馬車などはこれを超えるのに難渋した。

明治から大正初年ごろまでは、まだ市内中心部に初瀬井路の水を送りこまねばならないほど、水田があつたわけだ。光西寺の西側あたりにこの水が間断なく水音をたてて流れ落ちていたのである。

——大道町の藤棚に栄やんという人力車夫がいた。気の良い元気な車夫だったが、この人があるときりっぱな洋服の紳士を乗せて「乗り越え」にさしかかった。車をガラガラツと引きあげて、急にくだるわけだから乗客と車夫の呼吸が合わないとうまくいかない。ところが、くだんの紳士は、こんな経験がなかったとみえ、くだるとき、ガクツと前にのめった。そのはずみに車は前方にとんぼがえりをして、ひっくりかえってしまった。紳士は車から放り出され、ころころところんで堀の中へどんぶり。車夫の栄やんはとみると、ひっくりかえった車とともに転倒したが、堀に落ちた紳士など見向きもしないで車を起こすの

に一生懸命。車はあちこち破損して少なからぬ損害だ。ずぶぬれになって堀からはいあがった紳士にたいして栄やんはどなりつけた「車に乗りつけんもんが乗るから、こげなことになるんじゃ。こわれた車をどげしてくるるかッ」気の毒な紳士は栄やんに一言の言い返しもできなかった。

大道四丁目の白岩伊佐吉さんが明治の末ごろ大分高等小学校に通学する途中、目の前で起きたできごとだったと話してくれた。当時の人力車夫のけんまくをほうふつさせる一幕だが、通行人にとっては、まことにじやまなものが道路にのさばっていたものである。

市内に水田の耕作者がなくなった大正の末に、この「乗り越え」はとりはらわれ、荷馬車の馬は楽になり、人力車の乗客が災難にあうこともなくなった。

外堀から光西寺の門前を抜けている於北町筋は、墓参にゆく人のために花や線香を売る小店や、いちもん菓子屋などが並ぶいわゆる門前町だった。この町筋に「オイチニ」の薬売りが住んでいた。

軍服姿で手風琴を鳴らし「ここはお国を何百里…」の軍歌の替え歌をおもしろく歌って、おしまいに「オイチニ、オイチニ」とひょうしをとった。肩から斜めにつるした薬箱には「一薬館」と記してあった。その中から「征露丸」を出して売った。

こどもたちは「オイチニ」の薬売りがくると、遊ぶ手をやめてその歌声をうれしがった。いまも「オイチニ」の子孫は光西寺門前に住んでいて花屋さんをしている。光西寺では、現在もその家を「オイチニの花屋」と呼んでいるそうだ。

金池町の草分け

大分高等小学校が金池に建ってから、あのあたりにぼつぽつ家が建ち始めた。

最初にできたのは、やはり学童を相手にする文房具店で、正門前、外堀通りのミゾの向こう側に文明堂、つづいて、その筋向かいに秦文房具店が店を出した。また唐人町で古着屋をしていた式田長之助という人が唐人町の店をたたんで大分高等小学校の西側の畑の中に家を建てて移り「赤円子」という、こどもの腹薬を売っていた。これらの家は学校をとりまいて、畑の中にぼつん、ぼつんと建っているの、目立った。いわば金池町の草わけのようなものだった。



大正初年の豊州女学校

いま、盲学校の西側に古ぼけた木造二階建てのアパートが、東西に長く建っている。しだいに近代化してゆくあの付近からまるで置き忘れられてしまったような荒涼とした老屋のたたずまいだが、あれはかつて、やはり金池町の草わけとして田園地帯にぎぜんとして建っていた私立豊州女学校のあとである。

豊州女学校は明治四十一年に小野由之丞さんが創立し、最初於北町で開校していたが、明治四十四年に金池に新築移転し

た。それらしい、十数年女子教育に努めたが、昭和二年は廃校した。その後いろいろなことに使われ、戦災もまぬかれて、いまだに老屋をさらしているわけだ。

盲学校があそこに建ったのは大正八年。もともと盲学校は私立の大分盲啞学校として、志柿佐吉、小野田範司、佐藤周平、森清克の四氏によって明治四十一年に創立され志柿佐吉さんが初代校長となつて茶屋町に開校したのが出発点となつている。

しかし、それ以前にも盲人教育がなされていなかったわけではない。

明治二十五年に堤亮雪という人が、いまの大分郵便局付近で「温知分舎」という私塾をひらいて、あんま、はりきゅうを教えたのが盲教育の起こりといわれる。この私塾のあとを継いで豊後中村から出てきた志柿佐吉さんが茶屋町で「啓盲学校」を開いた。

また明治三十三年に戸次出身の高野太吉さんが「訓盲学校」を名ケ小路に開き、のちに後進の下毛郡出身の小野田範司さんにゆづつて上京した。さらに明治三十六年に庄内から出てきた佐藤周平さんが仲ノ町に「誨盲学校」を開設した。このように明治年代には私塾が三つもあつた。これらの塾の生徒は実習をかねて、夜の町を笛を吹いて歩き、流しのおんまをしていたのである。

いつまでも、こんな私塾ではないけない。内容を充実した「学校」にしようという話もちあがつたのは明治四十年で、国東出身の森清克さんが大分県教育会に招かれて「完備した盲啞教育」と題する講演をした。これが刺激となつて翌四十一年に三

つの塾が合併「私立大分盲啞学校」として茶屋町の啓盲学校あとに設立されたのである。その後、(明治四十四年)南新地の
大分町役場跡に移り、大正八年に現在地に新築移転。大正十年
に県に移管して「県立盲啞学校」となった。「盲」と「啞」が
分離したのは戦後のことである。

ナンテン屋敷

明治四十一年に歩兵第七十二連隊が大分に設けられたあとのこと。いまの日銀の向こうかど、生命保険会社の新築用地として高いへいをめぐらせている一角は「ナンテン屋敷」と呼ばれていた。大きな広い屋敷で、屋敷の周囲にナンテンの木が、生けがきがわりに植え並べられてあったからだ。冬になるとナンテンの実がまっ赤に色づき、その無数のすずなりの実が冬の日ざしを受けて、ひととき目立つ美しきであった。道行く人は、そのナンテンのみごとさに思わず立ち止まった。ナンテンの葉の間からのぞいてみると庭園には泉水があり、コイがゆうゆうと泳いでいた。

この屋敷の住人は七十二連隊に勤務する収中佐。毎朝、当番の馬丁が馬を引いて迎えに行き、あたりを払う乗馬姿で出勤していたのである。

この「ナンテン屋敷」に、当時の大分の人々をびつくりぎよ
うてんさせる大事件が起こった。

収中佐の娘に師範学校生徒を家庭教師に迎えていたが、美ぼ
うの青年だったのか、武人中佐が家庭的に厳格で冷たく、いま

という欲求不満をその細君がおぼえていたのか、そのところはわからないが、家庭教師と中佐の細君が深い仲となってしまうた。

これを感じいた収中佐が、ある夜現場をおさえ、家庭教師をピストルで射殺したのである。

この射殺事件の真相は、不義を押えられた家庭教師が恥じて中佐に殺してくれといった。そこで中佐が「恥じ知らず死ね」とばかり射殺したということになっている。裁判では「自殺ほう助」という判決だったそうだ。

「家庭教師が、深夜奥さんの寝室にしのび込んで射殺された」といううわさが、翌朝は町中にひろがっていた。ナンテンの間からこっそり現場をのぞいてみた人の話によると、被害者はムシロをかけて庭に横たわっており、被害者から教授されていた娘さんは、目を泣きはらして縁に腰かけていた。そして細君は、縁にすわって、静かにモチを切っていた。その無表情な顔を冬の日ざしがあざやかに照らしていたという。

間もなく収中佐一家は、このナンテン屋敷を引き払った。細君は、むろん離縁となったそうだ。

「収といえども収まらず、妻の乱行それゆえに……」

といったような歌が、その後ツジに立つ演歌師によってうたわれ、女学生などもこっそりうたった。

このナンテン屋敷には収中佐のあと田中勝輔少佐がいたが、この人はシベリア出兵で、ユフタの露と消えた田中支隊の隊長である。その後しばらく住む人もなく、こどもたちは「ナンテン屋敷」にまつわる話に耳をかたむけ「化け物屋敷」とこわがっ

た。昭和になってから秦英雄という人がここで医院を開業していたが、軍医として召集を受け、ノモンハンで戦死した。

痴漢の出る道

金池町は、いま上野丘中学校の西側一帯にまで広がって、ここを南金池町と称するほど住宅が建ち並んでしまった。

先日、あのあたりをさまよい歩いてみたが、まるで知らない町にまぎれ込んだような錯覚をふと感じた。戦後都市計画にしたがって、道路がしかれその道路にそってぼつりぼつりと住宅が建ち、しだいに軒を接する町づくりが進んだのだろうが、たんぼのあぜ道しか記憶によりみがえってこない私には、まるで突如として生まれた町のような妙な気持ちがまつわりついてはなれないのであった。五段田、七段田、あるいは茶の本、税所などというあのあたりの古い地名をいっても、南金池町の現在の姿とはおよそそぐわないものばかりである。

上野丘中学校は、行政区画の上では上野にはいるのだが、南金池町といっしょに語った方がよさそうだ。あのあたりで、いちばん最初に建設のつち音をひびかせたのは、あそこだからだ。大道町の片倉製糸ができたのと同じ年の大正六年に、いまの上野丘中学校の敷き地いっばいに大和製糸工場ができたのだった。本社は片倉製糸と同じ長野県諏訪郡川岸村で、同時にまるで大分への進出を競うように片倉に劣らない工場設備をととのえて操業を開始したのである。しかし片倉よりも大和の方が寿命が短く、昭和二年ごろ山十製糸と改称し、事業主も変わった。

さらにその後の金解禁恐慌のために経営がゆきづまり、工員およそ七百人の賃金不払いという窮状におち工場閉鎖のやむなきに至った。

これを大分合同銀行（現大分銀行）の藤田軍太頭取などが救済に乗り出して出水製糸工場として再生した。さらに戦時中は理研工場となり魚型水雷の部品を作るといふ軍需工場に変身して戦災で消滅したのである。その跡の敷き地がそっくり新制中学校用地となり、大分女子師範あと（現在の長浜小）を仮校舎として出発した上野丘中学校が移っていった。

激しい時代の波に、あの一角だけが揺り動かされたが、付近はいぜんとして稲が実り、レンゲの花が咲き、ハスの葉に露がころがっていたのであって、大正年代には外堀から上野までの道路は、大分中学の学生が通るほかはまことに寂しかった。昭和の初めごろでさえ、どうかすると昼も痴漢があらわれたというこゝで、鉄道官舎の細君連中はひとり歩きをこわがった。

大正の末ごろ、白昼に婦人の悲鳴がきこえ、運よく付近の人びとがききつけて痴漢を追いまわし、若宮神社のところに追いつめてつかまえたなら、犯人は私立中学校の生徒だったという思いもある。非行少年問題はいつの時代でも、おとなの頭を痛めていたのである。

有楽館付近

いまの小野建株式会社ところに大正七年ごろ有楽館という映画館ができた。市内の映画館はすでに大分館や喜楽館があつ

たが、それらは芝居や連鎖劇なども兼ねた小屋だった。だから本格的な映画館は有楽館だということで人気があったようだ。最初に日本映画の国活（国際活動写真会社）のフィルムをかけていた。こけら落としには「肉付きの面」という旧劇を上映したそうだ。のちに松竹映画をかけ、日本館と名を変えてから洋画専門館になったこともある。

有楽館ができる前、明治年代までは、現在長浜町に移っている常念寺が、あの一帯に広く境内を持つて建っていた。大分駅ができ、新道路が中央通りから抜けたとき、常念寺の建て物が道路にかかったために長浜町に移転したのだった。

有楽館の向かい側のミゾをへだてて二階建ての長屋があった。これはいまの日銀のところに、中央通りに向いて建っていたのだが、大正初年に清忠寺町にあった豊後銀行が土地を買って新築することになったため、外堀側に長屋を引いていったのだそうだ。この豊後銀行は、建築途中で経済界の変動で動きがとれなくなり工事を中止してしまった。長い間、赤レンガの未完成の建て物が荒れ果てたままほったらかしにされ、こどもの絶好の遊び場となっていたが、のちに貸しビルとなり、戦時中は憲兵隊がたてこもっていた。

外堀に向きを変えた長屋は有楽館の開館でがぜん生氣をとりもどし、赤じょうちんの飲食店や、たばこ屋、食堂などの看板をあげて繁盛していた。なにが幸いするかわからないものだ。ミゾには松丸太を渡し、踏み板をうちつけて、出入りしていたが、踏むとポコポコと音がし、腐った板を踏みこみそうであぶなっかしいたらなかった。こうして、有楽館を中心としたにぎ

わいが足がかりとなって外堀が開けていった。吉村薬品会社は、そのころは大分駅に向かつて右側に大道町一丁目から先代吉村益次さんが出てきて「薬種問屋吉村薬局」の看板を上げていた。戦時中に駅前の建て物がごっそり疎開となり、強制立ちのきをうけたため、戦後現在地に移って大発展をとげたのだ。

現在の九電は、前身の九水（九州水力電気）が豊後鉄道株式会社を合併したもので、大正五年に、豊後鉄道会社のあったところに支店を新築した。豊後鉄道は、別大電車の豊州電鉄が経営難で解散したあとをうけて設立され、明治四十二年に大野川に水利権を持つ大分水電株式会社を買収して沈墮の滝に発電所をつくり、大分町への電灯電力の供給と、別大電車経営の二つの事業をやっていたのである。

九水の最初の建て物は昭和十六年に改築されたが、そのとき古い建て物は払い下げて大道町一丁目に持っていき、アパートとなった。現在の天津荘アパートがそれだ。

【改訂履歴】

二〇〇七年一月十五日

正 完成時の大分停車場（大正初年）

誤 完成まぢかい大分停車場（明治四十四年）



オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「大分今昔」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

デジタルブック版「大分今昔」 第十章 ●外堀かいわい

2008 年 1 月 15 日改訂 1 版発行

筆者 渡辺 克己

挿絵 田中 昇（着色：佐藤 克治）

編集 大分合同新聞社

制作 川村正敏／別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局

〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内

© 大分合同新聞社

著者略歴◇ 渡辺 克己

大分県大分市佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、学芸部等の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退職。昭和二十七年から同四十三年まで大分市教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。
郷土史を研究し「大分今昔」「豊後のまがい物散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」「豊後の武將と合戦」「ふるさとの野の仏たち」等の著書。